朧月夜論

―その人物像再把握の試み―

武原弘

一

従来の朧月夜論を閲するに、その明るく積極的な性格、源氏の須磨退居にかかわる彼女の物語上の役割を中心とする多くのすぐれた論究があって、そこにはほぼ定説と呼ばれるにふさわしい結論が導かれつつあることを知ることができる。代表的な論考の一部を引きながら、これまでの朧月夜論の要点を確認しておきたい。

はやく、池田亀鑑氏は次のように論評された。

朧月夜にみられる一つの大きな特色は、この女性が、他のどんな女性にもみられない、自主的な積極さをもって、燃えるような恋愛をすることでしょう。激情的で肉感的な、ぐんぐんと相手にせまってゆく火のような情熱、こういう性格は、源氏の世界にはほかにみられないものですし、その当時としても型破りの女性です。そのかわり、この女性には理性的な反省がなく、知性の欠如が目立ちます。[注(1)]

また、関みさを氏も同様に、

作者は尚侍を明るい情熱型として冷静で内攻的な葵の上に対照して描き、（中略）春情のゆたかな艶めかしい（中略）春型の女性として（下略）[注(2)]

と、その造型について論じられ、さらに村井順氏は、とくに「花宴」巻においてはじめて源氏と出会った場面での朧月夜を評して、

恋愛に対しても以前の人達より遊戯的な考へ方を持ってゐる人物（中略）、空蟬などとは比較にならぬほど、貞操観念の薄い女であるといふことが言へるのである。[注(3)]

と述べられた。あるいは、竹村義一氏によっても、彼女の人物像は

花ならば牡丹にたとうべく、豊かにあでやかにうるはしく、しかも春の夜のおぼろ月のごとく、もの柔らかに悩ましい魅惑のなかに、明朗奔放な情熱と情趣的な繊細な心情を包んでいる。（中略）奥ゆかしい、つつましい深みに欠けている。[注(4)]

と把捉され、その情熱的情趣的性格についての諸賢の評は、ほぼ一致していることが理解される。かくて、林田孝和氏の要言を拝借するならば、朧月夜は

その当時の女性としてはまったく型破りの、情熱的でしかも開放的な女性であり、確かに現代女性としてみても少しもお

かしくない。[注(5)]

のである。あるいはまた後藤祥子氏も同趣旨の論として、

源氏物語が一方で重要な問題とする『女の身の持し方』という面からいえば、最もあるまじきタイプ（中略）、平安物語史のなかでもきわめて稀有な造型だといえるだろう。（中略）最も作者から遠い朧月夜の生き方は、興味の対象であり愛すべきものでこそあれ、作者にとって結局不可解ではなかっただろうか。[注(6)]

と述べておられる。

このような朧月夜評は、いうまでもなく物語作中に確かな根拠を得てなされていて、いずれも妥当なものと首肯される。が、私見によれば、そこにいくつかの検討未了の問題もあって、なおトータルな朧月夜像の把捉に達し得ていないのではないかと考えられる。たとえば、従来の朧月夜論では、「花宴」巻から「賢木」巻にかけての朧月夜の人物像に比重が大きくかけられて、「澪標」巻およびそれ以降についての考慮が不十分ではないか。あるいは、朧月夜の性格について詳考がみられるものの、彼女の内面世界――その思惟や決断を含む、女性としての生き方の問題についての考究が不足しているのではないか。あるいはさらに、作者の朧月夜造型に託した主題性あるいは意図の問題も、残されたままではないか。

このような問題意識から出発して、私は本稿において朧月夜像の再把握を試みたいのであるが、従来の諸説をいちいちとりあげてその論拠を再点検するという方法は用いず、作品分析の立場から、物語叙述に即しての吟味と考察を進めていくことにしたい。

二

朧月夜の人物像は、その初登場を描く「花宴」巻において、はやくも鮮明に型どられていると読まれる。桜花の宴の後、人皆寝静まった夜更けの弘徽殿で、春のおぼろ月を背景に朗詠を口ずさみながら現われ来る朧月夜は、そのときすでに開放的で自由な性格を示現しているというべきで、後藤祥子氏が説かれるごとく、「女房像としても、……『枕草子』の描く世界に近かろう。[注(7)]」のである。夜陰のなかでふと袖をとらえた男が源氏であると気づいた彼女は、「いささか慰めけり」（「花宴」(1)四二七頁）と、態度を柔らげる。かねてから源氏に対して好意を抱いていたのである。ゆくりなくも源氏と契りを交わしてしまった朧月夜は、

わびしく思へるものから、情なくこはごはしうは見えじ、と思へり。（中略）女も若うたをやぎて、強き心も知らぬなるべし。らうたしと見たまふに、（中略）艶になまめきたり。

（同、四二七頁）

と描かれて、男を強硬に拒否しない、若々しくて柔和な、華やかで優雅なその人柄が規定されている。このような性格を素因としてこそ、後の「葵」巻から「賢木」巻にかけての彼女の積極的で大胆な恋愛行動が成立するのは必然と解されよう。

同趣の性格描写は、「賢木」巻にもあらわれる。御匣殿から尚侍へと進み、朱雀帝の寵愛を一身に受けるようになった後も、朧月夜は源氏との忍ぶ逢瀬を続けるが、そこでもまた

女の御さまも、げにぞめでたき御盛りなる、重りかなる方は

いかがあらむ、をかしうなまめき若びたる心地して、見まはしき御けはひなり。（「賢木」(2)九七頁）

と描かれ、いっそう美しく若々しい、女盛りの彼女の魅力が強調されている。

さらに後、須磨事件の後は源氏との関係が絶えて久しい朧月夜について、その人柄を源氏と紫上とが批評しあう場面で、

尚侍こそは、らららうじくゆゑゆゑしき方は人にまさりたまへれ。（「朝顔」(2)四八三頁）

と恋敵を称揚する紫上に対して、源氏は

なまめかしう容貌よき女の例には、なほひき出でつべき人ぞかし。（同）

と同調している。ここでの用例を含めて、朧月夜の性格を叙述する一連の文章には、「なまめく」（「なまめかしう」）の語が一貫してあらわれるので、これを朧月夜像造型上のキー・ワードとみなすことができる。梅野きみ子氏も、「えん」だつ美の六条御息所と対照させて、「なまめく」美の朧月夜の魅力を強調されている。[注(8)] なお、「なまめく」（「なまめかし」）の語意に性的媚態の感じが含まれないことについて、氏の詳細な研究があり、[注(9)] 私も賛同したい。むしろ、「清新でみずみずしい美、しなやかでしっとりした美」（小学館『古語大辞典』）の意なでのあるから、訳語としては「優美だ」「優雅だ」が適当なのである。ただし、朧月夜について、「えん」と「なまめく」が並列して叙せられている文もあるので（前掲。河内本には「えん」の語はなく、本文に異同があるが）、「思わせぶり」（岩波版『古語辞典』）な魅惑美を少しく加味することも考慮に入れておくべきではあろう。

朧月夜が再登場するのは物語第二部「若菜上」巻で、多年の隔絶の後、はからずも源氏と再会する彼女は、ここでもまた

げにいま一たびの対面はありもすべかりけり、と思し弱るも、もとよりづしやかなるところおはせざりし人の、（中略）その世の事も遠からぬ心地して、え心強くももてなしたまはず。なほらららうじく、若う、なつかしくて（下略）（「若菜上」(4)七四～五頁）

と描かれ、懐旧の情に流されて過往の情交を今に復活させてしまう心弱さを見せる。気品があって、若々しくやさしい人柄もかつてのまま、と源氏には見てとれる。こうした朧月夜の性格を、後に源氏が

かの御心弱さもすこし軽く思ひなされたまひけり。（「若菜下」(4)二五三頁）

と、やや批判的にみているのにも、注意されるのである。

このようにみてくれば、朧月夜の若々しくて優美な、主情的趣味的性格が鮮やかで、しかもそれは作中に一貫的固定的であるかに読みとられやすい。しかし、ここでとくに留意されるべきは、私がさきに引用した朧月夜造型にかかわる物語叙述のすべてが、源氏を視点人物として施される描写機構のなかにおかれている表現である点である。すなわち、そこに描かれている朧月夜の性格なり人柄なりは、あくまでも源氏の眼に映ってとらえられた限りのものなのである。それが彼女の人物像の実体そのものと一致しているかどうかは、必ずしも自明的とはいえない。むしろ、色好みの「癖」の行為

者としての源氏の眼には、より本質的ともいえる彼女の内面世界——源氏との愛をめぐっての主体的決断や認識、あるいはその総体としての生き方の問題は、見えてはいないのである。

たとえば、「花宴」巻で、はじめて出会った源氏に、はやくも心身を解きゆだねる朧月夜の柔和すぎる性格については前にも触れたが、その条に、

女はまして、さまざまに思ひ乱れたる気色なり。（「花宴」(1)四二七頁）

とあって、彼女の内面心情の動揺が叙せられている。再三名前を尋ねられても答えず、

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ（同）

と悲観的ともとれる歌を詠ずるのは、「男の愛情を確かめ」[注(10)]ようとする気持にもまして、彼女の内なる「思ひ乱れ」に直結する態度なのである。ここで、朧月夜がなにを「思ひ乱れ」、なぜ「うき身」を嘆くのかについて、源氏はもとよりわかるはずもないし、わかろうともしていない。やや後文に

かの有明の君は、はかなかりし夢を思し出でて、いとものの嘆かしうながめたまふ。春宮には、卯月ばかりと思し定めたれば、いとわりなう思し乱れたるを（下略）、（同四三三頁）

と叙せられて、彼女は近々春宮妃として入内することが予定されており、今後の身の処し方に深く煩悶しているのであるが、こうした内面を知らない源氏にとって、女は比類なくコケティッシュなのだ。

あるいはまた、さきにも触れた「若菜上」巻での二人の再会場面を読みあらためてみよう。久方ぶりにまみえる朧月夜は、源氏の前に今もなお気品高く若々しいが、甦る旧交のなかで、

年ごろはさまざまに世の中を思ひ知り、来し方くやしく、（中略）ひとかたならぬ世のつつましさをもあはれをも、思ひ乱れて、嘆きがちにてものしたまふ気色など（下略）、（「若菜上」(4)七五頁）

と嘆息し、懊悩している。すでに、源氏の「つらき御心」（同、七一頁）を知りつくしてきて、「世の中」を認識しつくしている彼女に、拒みきれずして情交はあるものの、愛の復活を望む気持はもはやない。彼女の二首の詠歌

なみだのみせきとめがたき清水にて行き逢ふ道ははやく絶えにき（同、七四頁）

身をなげんふちもまことのふちならでかけじやさらにこりずまの波（同、七七頁）

が、まさしくそのことを証すると読まれるからである。[注(11)] かくて、ここでの朧月夜は、源氏の視覚でとらえられる旧情懐しい姿態にもかかわらず、その人物像の内面を大きく変貌させてきているといわなくてはならない。そして、その変貌はここで新たな表象なのではなく、物語をさかのぼって、はやく「澪標」巻にはじまっているのであるが、従来の朧月夜論はこの点について十分の顧慮を払っていないので、課題を残しているといえる。本稿ではこれを重視し、後節においてあらためて考察を施すことにする。

ともあれ、朧月夜の人物像は、源氏に外見される人柄や性格だけ

では覆いつくせない内面の深さをもっている。さらに注目し、彼女の内界における意思や認識の深層を追求してみよう。

三

朧月夜が、しばしば「情熱型」の女性人物であると評される所以のものを確認しながら、私には考えてみたい一つの問題がある。

彼女の源氏に対する恋愛態度は、確かに自発的、積極的なものと評されてよい。はじめて契りを交わした折の後朝の別れでも、扇を交換し、源氏に

さて絶えなむとは思はぬ気色なりつる。（「花宴」(1)四二九頁）

と思わせたのも、彼女自身の態度によるところが大きい。右大臣家での藤の宴の日、源氏のそぞろの詠みかけに反応し、返歌することで、二人の関係を継続的なものに成り立たせるのも、坂本昇氏が説かれるように、「朧月夜は源氏が邸に来ることを知って再会するつもりで待っていた」[注(22)]のであろう。以後二人の関係が深まっていく物語展開のなかで、

御匣殿なほこの大将にのみ心つけたまへるを、（下略）（「葵」(2)六八頁）

と、参内後も朧月夜は源氏を忘れず、それどころか、やがて尚侍となって朱雀帝の寵愛を得つつもなお、

御心の中は、思ひの外なりし事どもを、忘れがたく嘆きたまふ。いと忍びて通はしたまふことはなほ同じさまなるべし。（「賢木」(2)九四頁）

と叙せられる彼女の大胆さである。源氏との関係が周囲に気づかれるようになって、源氏の訪れが止絶えがちになると、彼女の方から積極的に文を送り、忍ぶ逢瀬を待っている（「賢木」(2)一一九頁）。源氏がこれに応じて密会を重ねるとき、状況に逆って燃える二人の情熱の火がやがて弘徽殿大后の逆鱗に触れるのは、物語に読みやすい展開といわなければならない。

ところで、こうした一連の描写に辿られる朧月夜の熱烈な恋愛態度を、単に彼女の生来の性向に由来する問題とのみ解すべきではあるまい。前にも触れたとおり、偶然の出会いからはじまった源氏との情交関係にあって、朧月夜は他方において春宮妃候補でもあるわが身の立場を顧慮して、深刻に思い悩んでもいた。源氏との関係が周囲に知られ、彼女の入内は延期となり、その後に御匣殿として後宮に参内したらしいが、なおも源氏に執心の態度を露わに示すのは、彼女が源氏との正式の結婚を望み訴えてもいたからで、事実、父親右大臣は、娘の意を受けて

げに、はた、かくやむごとなかりつる方も亡せたまひぬめるを、さてもあらむになどか口惜しからむ。（「葵」(2)六八頁）

と弘徽殿大后に相談し、後文によると、源氏にもその旨を申し込んだらしい（「賢木」巻、(2)一三九頁）。が、弘徽殿の強硬な反対と源氏の「めざましげ」（同）な態度にけ押されて、右大臣は二人の結婚を諦め、そのまま大后に同調して、再び朧月夜入内の計画を進めていくことになる。本来ならば女御としての出仕が望まれたが、源氏との不始末のため、尚侍の身分に甘んじての帝の側侍とせざるを得

なかったようである（「賢木」巻、同）。

こうした経緯による尚侍就任であったにもかかわらず、朧月夜がその後もさらに源氏との関係を続ける理由について考えてみたい。もともと尚侍という身分存在は、歴史に徴してみても微妙で曖昧な位置にあったものらしく、後藤祥子氏によるすぐれた考証に学んで[注13]、「尚侍は皇妃ではない」から、「結婚問題では自由な立場におかれていた」が、「やがて皇妃へ」の可能性もはらんでいた時代の尚侍像を物語に写したのが朧月夜であると理解される。この可能性にかけた大后や右大臣の「期待と自信」を、彼女は裏切るのである。それは、親たちの権勢主義あるいは権威主義に抗い、これを批判しつつ、源氏との恋愛に自由を求めて生きる朧月夜の主体的決断によっているのではないだろうか。すでにはやく、彼女は深刻な煩悶のさ中で、自らの東宮妃となる将来を見捨て、源氏を選び取っていた。いままた皇妃となる可能性にも背を向けて源氏との愛に耽溺していくがごとき朧月夜とは、ひっきょう、欺瞞的な大人社会に対する青春の反乱というべく、しかもそれは彼女の性格や人柄の問題なのではなく、すぐれて彼女の主体的な生き方の問題なのである。

前にみてきた朧月夜の激しい情熱や苦悶は、すべてこうした生き方としての決断に発し、これに収斂しているものと読まれよう。

四

朧月夜事件を直接契機とする源氏の須磨退居で、物語における彼女の役割は完了するといわれる。彼女が活躍する主要な巻は「花宴」と「賢木」の二巻で、以降では「須磨」・「澪標」・「若菜」上下の諸巻にわずかに姿をみせる程度なので、池田亀鑑氏が説かれるように、朧月夜は「むしろ短編的もしくは中編的な意味における」[注14]登場人物として描かれていると見なされやすい。が、他方において増田繁夫氏が論じられるように、「朧月夜は、（中略）物語の筋を展開させる役割だけを与へられた人物ではなく、作者は人物自体に対する関心をもって描いてゐる」[注15]と読まれ、とくに「澪標」巻における朧月夜像にはいっそうの注目が必要なのである。物語叙述に即して、いささか再検討してみたい。

件の「人わらへ」の過失にもかかわらず、朧月夜に対する朱雀帝の情愛はますます深まる。退位をま近にして尚侍の身の上を思う彼の真情は切実で、これに対応して

女君、顔はいとあかくにほひて、こぼるばかりの御愛敬にて、涙もこぼれぬるを、（「澪標」(2)二七一頁）

と描写される彼女の内面は、「いと恥づかしうも悲しうもおぼえたまふ」（同）後悔の念に満たされている。源氏との過去が悔まれているのである。この場面における心理描写をやや詳しく吟味してみよう。

御容貌などなまめかしうきよらにて、限りなき御心ざしの年月にそふやうにもてなさせたまふに、めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりし気色心ばへなどもの思ひ知られたまふに、などてわが心の若くいはけなきにまかせて、さる騒ぎをさへひき出でて、わが名をばさらにもいはず、人の御ためさへなど思し出づるに、いとうき御身なり。（「澪標」(2)二七一頁）

朧月夜が、年月と共に深まっていた朱雀帝の愛情をよそに、源氏に一途に溺れていったわが青春の過失を総括するのが、文末の「いとうき御身なり」である。ここで私に留意されるのは、この叙述が「朧月夜の思いと草子地とが一体になった文章」[注(16)]である点で、己れの「いとうき」過失を後悔する朧月夜の心情に作者もまた共感しているのは確実なのであるが、一体化の前提にある二者の相異も、同時に確認されなくてはならないのである。さきに引いた描写文において、朧月夜心情表現語「いとうき」は、意味上、上接の叙述「めでたき人なれど……など思し出づるに」を承けているわけで、源氏との過去を述べた範囲に限定して解釈されてよい。これより後の場面で、今になってなおも源氏が性懲りもなく情愛を示すとき、「女はうきに懲りたまひて」（同、二八九頁）と叙せられて、ここでも「うき」は朧月夜につらく思い出される源氏との過去の過失を意味しているのを知るのである。ところが、さきの「いとうき御身なり」を一続きの草子地文節とみる立場に拠るならば、この述部が承ける上接文の範囲は広がり、この場面描写の冒頭「おりゐなむの御心づかひ近くなりぬるにも」以下全部――本文の引用は省略したが、帝の朧月夜に対する愛情告白や怨言の部分を含む全体がこれにかかる表現機構となる。すなわち、朱雀帝の深情にも応え得ず、あるいはむしろ薄情な男だった源氏との過失を悔みつつ、一人とり残されて「心細げに世を思ひ嘆きたまへる」（同、二七〇頁）朧月夜の現在の身の上を総括し、作者の詞として評したのが、「いとうき御身なり」である。それはまさしく、この場面において作者が身代わってする、あるいは一体化してする朧月夜の現実認識のありようを指し示す叙述なのである。

朧月夜において、現実を「うき身」とする認識の深まりは、先行諸巻の物語中には読まれないもので、人物像としても「澪標」巻にはじまる新たな造型と認められてよい。それが、この巻における朧月夜の源氏に対する批判的評価および態度と表裏一体のものであることはいうまでもない。彼女は、いままでの源氏との関係を回想し、

めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりし気色心ばへ（前掲）

の人との浅い仲として思い出している。また、今さらの源氏の誘いにも、

女はうきに懲りたまひて、昔のやうにもあひしらへきこえたまはず。（同、二八九頁）

と叙せられて、朧月夜は軽くこれをいなし、あるいはきっぱりと拒絶して、応じない。ここでの彼女には、かつてのような優美で華やかな姿態も耽美的情趣的性格も見あらわされず、むしろ自省的で意思的な態度がきわだって印象深い。上坂信男氏の評に従えば、それは「貴重なる脱皮・成長であった」から、後の「若菜上」巻に描かれる「倫理的な女性に回心した朧月夜の姿」にも連動していくものであるとされる。[注(17)]さきに触れるところがあったが、こうした文脈の中に朧月夜の人物像の変貌を読みとることは十分可能であり、かつ肝要である、と私も考えている。

このように見てくれば、源氏との過去を悔い、「うき身」の現実を認識し、朱雀院の愛情を見つめなおすことを通して自身の新しい

生き方を探求しはじめた朧月夜の新生を知ることができるのであるが、私は前述の朧月夜‖作者一体の表現機構を重視して、ここでの朧月夜像にこそ作者紫式部の深切な主題意図がこめられていると解したい。すなわち、深い自己凝視と現実への確かな認識とによって自己新生への方途を探ぐる朧月夜に身を寄せて、作者もまた遊戯的なのはむしろ源氏であるその実意薄い色好みを問いなおし、鋭く批判しているのではないだろうか。以後、朧月夜は物語の舞台に姿を現わすことが少くなるが、それはいっそう華やかさを増す源氏の色好みの世界から彼女を遠ざけ、静かに自己省察の営みを続けていく彼女を守ろうとする作者の配慮とも読みとられる。

思うに、この物語において、源氏との愛とその挫折の体験を通してわが「うき身」を深く認識し、新しい自己への再生を企てて生きあらためようとする女性人物はほかにも多い。空蟬や夕顔や明石君などの中の品の女性から、藤壺中宮や六条御息所などの上の品の女性に至るまで、それぞれの身分や境遇、立場や状況のちがいによって源氏との愛のかたちはさまざまであっても、彼女たちはひとしなみに深い苦悩を味わい、わが身の「うさ」を痛嘆している。それぞれの生の深みから発せられるその嘆きに作者の主題的思想がうち込められているのは確実で、いまは本文による引証を省くが、そうした意味から、彼女たちはそれぞれの造型において作者の分身たり得ているのである。当面の朧月夜についても、事情は同様であろう。

なお、「うし」の語は、一般的な意味として「思うままにならない世の中、宿世を憂きものと思う」(岩波版『古語辞典』)と説明され、その用法に従って、抽象的観念的心情表現語と解されやすい。が、物語のなかでこの語は、たとえば源氏と結婚できない身の上とか、結婚後の処遇問題に悩む身の立場とか、女性人物のしたたかな現実感覚を伴う認識の表現に近い位相の語である。朧月夜と源氏の最初の出会いの場面における彼女の詠歌「うき身世に……」(前掲)について再びみても、ここで彼女は漠然と人生を悲観しているのではなく、源氏とは結婚できないであろう(やがては捨てられるであろう)わが身の「うさ」を先見して、いま、男の愛情を確かめようとしているのである。

『源氏物語』におけるこのような「うき身」の思想については、あわせて『紫式部日記』中での作者の「うき身」(「うき世」)認識のありようと関連させて、さらに詳しい考察が必要なのであるが、他日を期したい。なお、『紫式部集』中にも「うし」の心情を詠じた歌は多く、含めて検討を要するのであろう。

五

「若菜上」巻における朧月夜再登場の問題について小考を加え、本稿でのまとめを得たい。

この巻は、女三宮の降嫁にはじまる紫上の苦悩および六条院世界の崩壊という新たな主題を語りすすめるものであるが、その壮大な悲劇の開幕後のはやい場面で、女三宮と紫上の間に揺れ動いて心安んじるいとまのない源氏が、唐突に、これまで十余年の隔てをなしてきた朧月夜を訪ね、一夜の逢う瀬をもつ。再会の感激におし倒された二人に、情交の時はいちはやく過ぎてゆく。後朝の別れに

年月のつもりにけるほども、そのをりのこと、かきつづけあ

はれに思さる。（「若菜上」(4)七五頁）

と、回顧の情恋々たる思いに耽る源氏にとって、ここでの朧月夜は、清水好子氏が説かれるように、まさしく「過去の甦り」なのである。[注(19)]

秋山虔氏によると、この再会場面における「光源氏対朧月夜の関係が、未来に発展すべき何ほどの契機をももたない」もので、しかもこれを語る作者の方法は「一途にてんめんとして主情的に低迷している」が、それは前後の物語世界からの「逸脱」であっても、それを媒介してこそ光源氏―紫上―女三宮の「きびしい矛盾の世界」の「内実」[注(19)]がきわだたせられ、また展開を続行し得るのであるとされる。朧月夜再登場の意味も、氏のご高論において自ずから解き明かされていると考えられ、あるいは梅野きみ子氏が「女三宮降嫁とともに、紫上をして源氏への不信感を、否、作者紫式部を[注(20)]して男性への不信感を、助長するところにあるのではなかろうか」と述べられるのも、論旨において両氏説はほぼ共通していると私は学ぶことができる。朧月夜との自己逃避的な再会をいちはやく見ぬかれ、源氏と紫上の仲の亀裂が決定的に深まっていくところに六条院崩壊への危機が増大するのを読み辿るとき、その役割の上からも、朧月夜再登場の意義は大きいであろう。

二節においても触れたように、再会して情交は復活させたものの、いまの朧月夜に源氏への愛情が甦っているわけではない。前引用歌のほかに、たとえば院の出家をさしおいて源氏と再会することを拒む彼女の態度について、本文の叙述は

…げに人は漏り聞かぬやうありとも、心の問はんこそいと恥づかしかるべけれと、うち嘆きたまひつつ、なほさらにあるまじきよしをのみ聞ゆ。（「若菜上」(4)七一頁）

とあり、自らの主体的意思による倫理的判断が確固たるものとして見受けられる。源氏の強引で巧妙な口説きに会って身を許したものの、朧月夜はあくまでも自省心を忘れていない。

今さらにいとつつましく、さまざまに思ひ乱れたまへるに、（中略）いと若やかなる御ふるまひを、心ながらもゆるさぬことに思しながら、（下略）（同、七七頁）

と、自身を責めて苦悩する彼女である。

こうした朧月夜の内面にある自省心や倫理意識は、源氏の眼には見えないままに、彼女の生に深々と根付いていたので、やがてはその生き方を根源から変革させることになる。「若菜下」巻における彼女の出家がその徴証である（(4)二五二頁）。彼女が出家をはじめて志望したのははやく、朱雀院が出家を果された折であった（「若菜上」(4)六九～七〇頁）。院の諫止によって諦めざるを得なかったのであるが、以来彼女は仏事に励んでいたと叙せられている（同）。それが源氏との再会前のことである点に留意すれば、さきに述べた朧月夜の内面的倫理意識の確かさが了解され、当然ながら、源氏と彼女の精神的懸隔の大いさを知らされるのである。朧月夜は、すでにはやく源氏との恋を清算し、はるかな求道の旅路へと出発していたのである。なお、「若菜上」巻において、朧月夜は源氏との旧交を温めつつも、「うき身」を嘆いたことは一度もなかった。私見によれば、それは彼女が源氏との結婚を完全に思い捨て、その意味での現実認識を微塵ももっていなかった証左なのである。

注(1) 池田亀鑑『源氏物語入門』（現代教養文庫、昭32）一〇三頁。
注(2) 関みさを「源氏と朧月夜」（「国文学」昭34・9）
注(3) 村井順『源氏物語論上巻』（中部日本教育文化会、昭37）一七四～五頁。
注(4) 竹村義一『源氏物語女性像』（有精堂、昭45）五一頁。
注(5) 林田孝和『源氏物語の発想』（桜楓社、昭55）四一頁。
注(6) 後藤祥子「朧月夜の君」（『源氏物語必携Ⅱ』学燈社、昭57、所収）
注(7) 注(6)に同じ。
注(8) 梅野きみ子「六条御息所と朧月夜の君」（『源氏物語の探究第八輯』源氏物語探究会編、風間書房、昭55、所収）。
注(9) 梅野きみ子『えんとその周辺』（笠間書院、昭54）。
注(10) 『日本古典文学全集源氏物語』(1)頭注による。
注(11) 「身をなげん……」の歌について、「表ではあなたの愛は偽りだと拒絶しながら、裏には真実の愛なら応じます、の意を含む」（『日本古典文学全集』(4)頭注）との解があるが、表の意味が真実であるとしたい。
注(12) 坂本昇『源氏物語構想論』（明治書院、昭56）三二六頁。
注(13) 後藤祥子『源氏物語の史的空間』（東京大学出版会、昭61）七二～三頁。
注(14) 池田亀鑑「源氏物語の構成とその技法」（『源氏物語研究』有精堂、昭45、所収）
注(15) 増田繁夫「朧月夜と二条后」（大阪市立大学「人文研究」31―9　昭55・3）
注(16) 注(10)の書(2)の頭注による。
注(17) 上坂信男「夕顔とその前後」（『源氏物語研究と資料』古代文学論叢第一輯、紫式部学会編、武蔵野書院刊、昭44、所収）
注(18) 清水好子「源氏物語の主題と方法」（『源氏物語の研究と資料』古代文学論叢第一輯、武蔵野書院、昭44、所収）
注(19) 秋山虔「『若菜』巻の一問題―源氏物語の方法に関する断章―」（「日本文学」昭35・7）
注(20) 注(8)に同じ。

なお、テキストは『日本古典文学全集源氏物語』（小学館）を用い、引用文の後に巻名、頁数を記した。